



Title	「帝國大學新聞」：掌編「盜賊」の背景と「逆行」
Author(s)	平, 浩一
Citation	太宰治スタディーズ. 2010, 3, p. 36-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97694
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「帝國大學新聞」

—— 掌編「盜賊」の背景と「逆行」

平 浩 一

一九二〇（大正九）年、学生同人によるタブロイド判旬刊として発刊。その後、普通新聞紙大・週刊へと移行し、関東大震災で大きな被害を受けるも、一九二八（昭和三）年に理事会を創立、その頃から大きな躍進を遂げていったのが「帝國大學新聞」である。発行部数は最高六万部を記録し、一九三五（大正一四）年の段階では四ページであった紙面も、昭和期に入る前後から徐々に増え、二六年「六ページ、二九年「八ページ、三三年「一〇ページ、そして一九三五（昭和一〇）年には二二ページ建となった（参照「殿木圭」『帝國大學新聞』の歴史』、帝國大學新聞記事・執筆者索引、一九八五・五、不出版）。はからずも、昭和一〇年前後の「文芸復興」期に、「帝國大學新聞」も隆盛を迎えていったのである。

まずは「帝國大學新聞」において、本号の特集である『晩年』前後の文学状況が、どのように捕捉されていたかを簡単に見ておこう。大宅壮一は一九三四（昭和九）年の『復興・漫筆』（一九三四・五・二一、第七面）において、『近頃は「復興」ばかりである。（中略）その掛け声によつて実体をつくり出さうとしてゐるのであるがさうは問屋がおろさないことは、「文芸復興」の例に徴して明かだ』とし、『純文学』の立場は甚だ不利である』という悲観的な意見を提示した。

しかし、その後の「帝國大學新聞」紙上では、「文芸復興」や「純文学」の行く末に、比較的樂觀的な見方が続いていく。中島健蔵は「純文学の舞合」（一九三五・六・一七、第九面）で『文芸復興の声は、実はジャーナリストの懸け声であつたかも知れぬ』としながら、大宅に反論する形で、『その結果が空であつたといふのは天邪鬼の呟きである。私は、飽くまで期待を棄てない。天才は別のことである』と述べている。また、尾崎士郎は『純文学作家が新聞小説に進出して来た』ことが、『純文学的要素の上に大衆的魅力を期待する傾向があらはれてきたこと』を示すとし、『一つの進展であると見てい』と分析している（『新聞小説の限界と純文学の方向』一九三五・一一・二一、第九面）。さらに、舟橋聖一は「純文学は恢復するか」（一九三五・一二・一六、第九面）において、『新聞小説欄』で『純文学者の進出といふ現象が見られ、相当の収穫を残してゐる』とし、『純文学者を起用しつゞければ、読者もこれに馴染むにきまつてゐる』と断言している。

一九三三・三五（昭和八・一〇）年の時点で、「純文学」の行く末に悲観的な見方をしていたのは、何も

大宅壮一ひとりに限らない。様々な媒体において、板垣直子や豊島与志雄、杉山平助ら多くの面々が、「文芸復興」という現象へ懐疑的な眼差しを向けていた。しかし、「帝國大學新聞」では、後述するように、旧制高校生——帝大在學生——卒業生を媒介する インテリ層が読む新聞 という特殊な性質を反映してか、「文芸復興」や「純文学」の行く末に、新聞 という媒体に注目しながら肩入れをしていくという傾向が存在していた。そして実際に、この「文芸復興」の時流に乗る形で、新進作家として飛躍していった帝大生のひとりが、太宰治であつた。

太宰治は「帝國大學新聞」に、五作品を寄稿している。後に小説「逆行」の一部となつた「盗賊——（コント）」（一九三五・二〇・七、第九面）を筆頭に、「校長三代——弘前」校長検事局へ行く」（一九三八・一〇・三一、第八面）、「正直ノオト」（一九三九・五・一五、第七面）、「鬱屈禍」（一九四〇・二・一二、第七面）、「独語いつ時」（一九四〇・一一・二五、第六面）である。

注目すべきなのは、これら五作品を発表する以前、「帝國大學新聞」紙上に、太宰の本名が一度掲載されていることだ。それは、一九三〇（昭和五）年三月二五日・第二面の「法文合格者氏名」欄、すなわち、大学合格者の氏名が全面に掲載されたページであつた。同面の「文学部（四百七名）」、「仏蘭西文学科（二十三名）」の欄を見ると、『津島修治（弘前）』という形で、氏名と出身高等学校名が明記されている。この事実を端緒にしたとき、本媒体の特性と太宰治との関係が徐々に浮かび上がってくる。

「帝國大學新聞」は、「新学士就職状況」欄が毎年掲載されるなど、『在學生と先輩をつなぐ』（長谷川泉「帝國大學新聞」、『日本近代文学大事典 第五巻』一九七七・一一、講談社）という性質を持っていた。しかし、それ以上に、旧制高等学校と太いつながりを持っていたことは見逃せない。特に、入学試験の情報には力を入れており、毎年の入試問題はもちろんのこと、「高校別東大入学率一覧」欄や、先に挙げた「合格者氏名」欄、葉書で試験対策のアドバイスに応じる「入試相談」のコーナーまで設けられていた。そのほか、各高校のニュースも定期的に掲載されるなど、旧制高校の学生を、読者層として強く意識していたことが分かる。

こうした「帝國大學新聞」の特色は、太宰治が寄稿した作品にも強い影響を及ぼしていた。「校長三代

——弘前「校長検事局へ行く」は、副題からも分かるとおり、旧制弘前高等学校について記したエッセイであり、「高校今昔の横顔」という特集記事の第一六回目、記事の上部には弘前高校の俯瞰の写真も掲載されている。また、「正直ノオト」では《帝大の構内》について言及しており、「鬱屈禍」でも《この新聞（帝大新聞）の編輯者は、私の小説が、いつも失敗作ばかりで伸び切つてゐないのを聡明にも見てとつたに違ひない》と、冒頭で自己言及している。このように、太宰は「帝國大學新聞」に寄稿する際、媒体の性質を特に強く意識していたことが見えてくるのだ。

さて、これらの背景を踏まえたうえで、本号の特集である『晩年』前後に合致する作品、「盗賊」に焦点を当ててみよう。この作品は、先述したように、第一創作集『晩年』刊行時、第一回芥川賞候補にもなつた小説「逆行」の一部として収録された。掌編の順は「蝶蝶」「盗賊」「決闘」「くろんぼ」であり、ある男の晩年・大学時代・高校時代・少年時代を、まさに「逆行」している作品であることは、よく知られている。この時間的逆行は、東郷克美氏も指摘するように、『晩年』自体を、あるいは「太宰治」という物語を紡ぐ、重要な要素であつた（『太宰治という物語』二〇〇一・三、筑摩書房）。

このように、『晩年』の一部、或いは「逆行」の一部として見たとき、逆行と変身という効果を演出する一翼を担つた重要な掌編として位置づけられる「盗賊」であるが、しかし、その背景を「帝國大學新聞」へと移したときには、また違った色彩を帯びていく。

旧制高校生——帝大在学生——卒業生の間をつなぎ、特に高校生への受験情報に力を入れていた「帝國大學新聞」という媒体の中で、『菊花の御紋章』、『並木路』、『化粧煉瓦』、『講堂』、『電気時計』、『銅像』、『庭園』といった帝大構内の様子のほか、学生の姿、教授の姿、試験時の教室、食堂のメニュー等々、太宰には珍しい過剰なまでの情景描写が為された「盗賊」は、見事な帝大の紹介になっているのだ。しかし同時に、『ことし落第ときまつた』それでも試験は受けるのである』という一節から始まるこの掌編は、明らかに異彩を放つてもある。すなわち、「盗賊」という掌編は、その背景を『晩年』や「逆行」から「帝國大學新聞」へと移したとき、媒体の特性を強く意識しながら、微妙な差異化を図つた作品として、また新たな輝きを放つていくのである。